

# 15世紀ロシア人の見たドイツ，イタリア都市

— 「フィレンツェ公会議への旅」の記録から —

中 村 喜 和

## はじめに

1438年から39年にかけてイタリアのフェラーラとフィレンツェで開催された公会議には、ロシアからも代表が参加した。もともとこの会議は東ローマ帝国に対するオスマン・トルコの脅威が日毎に増大する情勢の中で、東西の両キリスト教会の合同を目指したものであり、ロシア府主教イシドーロス（ロシア風と呼ばばイシドール）が所期の目的の達成のため積極的な役割を演じたことはよく知られている。

イシドーロスはギリシャ人、あるいはギリシャ化したブルガリア人であり<sup>(1)</sup>、すでに1431年からはじめていたスイスのバーゼルの公会議にコンスタンチノーブルから派遣された経験をもっていた<sup>(2)</sup>。しかしスーズダリ主教アヴラーミをはじめとするロシア人の随行者たちの大部分にとっては、生まれてはじめての西ヨーロッパへの旅であったと思われる。彼らはフィレンツェ公会議について数種類の記録をのこしたが、そのうちの1点に依拠して、ロシア人がイタリアやドイツの都市をどう見たかを紹介し、あわせてその記述の特徴を指摘することが小論の目的である。

「フィレンツェ公会議への旅」（以下、単に「旅」と略称する）として知られるこの旅行記を書いた人物の名は知られていない。全体の記述がモスクワを経てスーズダリへの帰着をもって終わっているところから、アヴラーミ主教の書記であったと一般に考えられている。しかしイシドーロスを「主人」と呼んでいるので、先年物故した中世史家チェレプニーンが指摘するように、この作者は府主教に直属する従者だったかもしれないし、文体からみてその身分が聖職者ではなくて俗人だった可能性もある<sup>(3)</sup>。

---

(1) Советская историческая энциклопедия, т.6, М., 1965, стр. 324.

(2) Макарий, История русской церкви, т.5, кн.2, СПб., 1886, стр. 351.

(3) Л.В.Черепнин, К вопросу о русских источниках по истории Флорентийской унии. "Средние века", вып.25, М., 1964, стр. 184. なお作者についての問題を含め「旅」のテキストやその成立、伝来、研究史に関して最もくわしいのは次の書物である。Н.А.Казакова, Западная Европа в русской письменности XV - XVI веков. Из истории международных культурных связей России, Л., 1980, стр. 7-55.

なお小論で底本として用いるテキストは1981年に刊行された「中世ロシアの文学記念碑、14世紀—15世紀中葉」に収められたもの、校訂者はナターリア・カザコワである<sup>(4)</sup>。

## 1 ロシアからイタリアまでの往復

公会議にむけて旅立ったロシア使節団のうち名前が判明しているのは、代表格のイシドーロスとアヴラーミイのほか、スーズダリの僧シメオン、修道院長ワシアン、トヴェーリ公派遣の貴族フォーマ・マトヴェーエフ、それにギリシャ人の僧グリゴリオスなどであって、それ以外の者の名は伝わっていない。使節団の人数も正確にはわからないが、19世紀の教会史家マカーリイは約100人と推定している<sup>(5)</sup>。

まず「旅」の記述にしたがって彼らの道中の経路と日付を示しておく。

1437年 9月 8日 モスクワ出発

9月 14日 トヴェーリ着、9日間滞在。トルジョーク、ヴィーシニイ・ヴォロチョークを経てムスタ川を下り

10月 7日 ノヴゴロド着、7日間滞在<sup>(6)</sup>

12月 6日 プスコフ着、7週間滞在

1438年 1月 24日 プスコフを出てリヴォニアにはいる

2月 4日 リガ着

5月 5日 リガを出て西ドヴィナ川をくだる

5月 7日 バルト海に出る

5月 19日 リューベック着

6月 6日 リューベックを出てメルンに着く。以下、リューネブルク、ブラウンシュヴァイク、マグデブルク、ライプチヒ、エルフルトを経てバンベルクに着く

6月 29日 バンベルク発、以下ニュルンベルク、アウグスブルク、インスブルック、トレントを経てパドヴァに着く

8月 18日 フェラーラ着

フェラーラにはすでにローマ教皇エウゲニウス4世、東ローマ皇帝ヨハネス8世とコン

(4) Н.А.Казакова, Хождение на Флорентийский собор. в кн. "Памятники литературы Древней Руси. XIУ - середина XV века", М., 1981, стр. 468-492. このテキストには現代ロシア語訳がつけられている。また Н.И.Прокофьев /ред./, Книга хожений. Записки русских путешественников XI - XV вв. М., 1984. に収められているのも同じカザコワ校訂によるテキストである。

(5) Макарий, указ. соч., стр. 352.

(6) これは7日ではなくて7週間であろうとする推定がある。写本の誤記とみるわけである。ノヴゴロドとプスコフのあいだはせいぜい200キロなのでこのほうが筋がとおっている。G. Stökl, Reisebericht eines Unbekannten Russen (1437-1440). "Europa im XV. Jahrhundert von Byzantinern Gesehen", Graz, 1965, S. 175.

スタンチノーブル総主教ヨシフ2世がそれぞれ随員をしたがえて到着して、予備的な折衝は4月から開始されていた。公会議の開会式は10月8日に挙行された。この式典にはカトリック側から教皇と20人の枢機卿と司教たち、正教側からは皇帝とその弟のドミトリオス、それに総主教と22人の府主教などが出席した。その後、翌年の1月10日までのあいだに15回の会議が開かれ、会場がフィレンツェに移される。

1439年 1月27日 フェラーラを出てポー川を舟でくだる。以下、アルジェンタ、アバツィア、ボルゴ・ディ・ピターノ、ロンキ・ディ・ベルナ<sup>(7)</sup>を経て

2月4日<sup>(8)</sup>フィレンツェ着

2月26日に議事が再開され、5月2日までのあいだに10回の会議がもたれた。7月5日東西両教会の合同文書に双方の代表が署名、翌6日に聖母教会で記念のミサが行なわれた。

9月6日 フィレンツェ発。以下、スカルベリア、フィレンツォーラ、カブレノ、ボローニャ、フェラーラ、キオッジャを経て

9月15日 ヴェネツィア着

12月22日 ヴェネツィアを出帆し、イストラ半島にわたる。ボラでロシア代表団は二手に分かれる。府主教は2名の騎乗者、15人の歩行者とともに馬で陸路をとり、主教アヴラーミイと貴族たちは舟行。合流地点は不明

1440年 1月17日 セニエで下船。以下クロアチアのザグレブ、ハンガリーのブダ、ポーランドのクラクフなどを経て

5月21日 ガーリチ着

7月10日 リヴォフ発、夏じゅうポーランドとリトワの各地をまわり

9月19日 モスクワ着

9月24日 モスクワ発

9月29日 スーズダリ着

モスクワを出てフェラーラに到着するまでにはほぼ1年を要し、公会議の最初の開催地フェラーラに5カ月、第二の開催地フィレンツェに7カ月滞在し、帰途はモスクワまでふたたび1年、しめて3年の旅であった。ただし、往路はリガで3カ月、復路はヴェネツィアでおなじく3カ月というかなり長期の逗留が含まれている。

多分フェラーラ滞在中であろう、「旅」の作者はローマをたずねてこの町についての記述をのこしている。同一の人物の手になることはまちがいないので<sup>(9)</sup>、小論ではまとめてあつかうことにする。

(7) 原文はベルナ Berena. ロンキ・ディ・ベルナとするのは上記 G. Stökl の説。上掲書 S. 183-184.

(8) これは2月14日の誤りであろう、とカザコーワは推測している。Н.А.Казакова, Западная Европа..., стр. 35. フェラーラからフィレンツェまでは約200キロ、しかしこの間アペニン山脈を横断する行程だからである。

## 2 「旅」の記録の「事務的」性格

「旅」の作者が俗人ではないかという推測が古くからあるのは、その記述そのものに起因している。道中や会議の外的側面を正確に手落ちなく書き留めておくことを作者は第一に心がけているのである。

旅程について言えば、まず通過地点とその相互間の距離である。たとえば、モスクワからトヴェーリまでは180ヴェルスタ（1ヴェルスタは1.07キロ）、トヴェーリからトルジョークまでは60ヴェルスタ、トルジョークからヴォロチョークまでは70ヴェルスタ……という具合である。この調子は往復とも一貫している。おもしろいのは、このころプスコフから先はロシア領ではなく、作者によれば「ネメツの地」（ネメツはドイツ人を指す）であったが、それでもユリエフを経てリガまで、さらにリガからリューベックまでの海上路はヴェルスタで里程が示されていることである。

リューベック上陸以後、距離の単位はミーリアにかわる。ドイツ語ではマイル、すなわちマイルと同根で、7.5キロにひとしい<sup>(10)</sup>。イタリアでもミーリアが用いられるが、その実際の長さは1.25キロとなる。同じ名称ながら、実質は6分の1に減るわけである。

帰途ヴェネツィアからバルカン半島に上陸してのちクロアチア、ハンガリー、ポーランド、リトワの領内はむろんのこと、モスクワ大公国の版図にはいていたヴァジマとモジャイスクのあいだすら24ミーリアというように、作者はイタリア風の単位を使いつづけている。幾分ヨーロッパかぶれしたものでしょうか。

作者自身が歩きながら測量したはずはないので、代表団が通過する都市や集落の名を記録するさい、作者は土地土地の人間から几帳面に道のりを聞き出したものと想像される。道筋への彼の関心はほとんど偏執狂的な域に達していて、リガからリューベックまで200頭の荷駄隊が通過した経路とその距離（1500ヴェルスタ）も書きもらしていない。作者を含め府主教と随員たちはリガから1000ヴェルスタの海上路を選んだのだった。

もっともこの傾向には先例があって、12世紀初頭の聖地巡礼記「ルーシ国修道院長ダニールの旅」もコンスタンチノーブルからエルサレムまで、エルサレムからヨルダンやガリラヤにいたる詳細な道程を含んでいる<sup>(11)</sup>。公会議への「旅」の作者は中世ロシア紀行文学の伝統を忠実に踏襲したにすぎないのである。

ここで思い出されるのは、18世紀80年代にロシアへ漂流した大黒屋光太夫からの聞書「北様聞略」である。同書の「漂海送還始末」の末尾に「海陸路程」と題された1節があり、漂着地であるアレウト諸島中のアムチトカからシベリア、ペテルブルグ往復を経て蝦夷根室にいたる道のりがヴェルスタでもれなく記録されているのである<sup>(12)</sup>。

(9) Н.А.Казакова, Хождение..., стр. 589.

(10) Н.А.Казакова, Хождение..., стр. 587.

(11) 最近出たテキストとしては次のものがある。Памятники литературы Древней Руси: XI11 век, М., 1980, стр. 24-124: Н.И.Прокофьев /ред./, указ. соч., стр. 27-79.

距離に比べると日付のほうはそれほど丹念に記録されていない。主要な都市に到着した日、あるいはそこから出発した日を書いているだけである。

「旅」の記録の網羅性は公会議に集まった東方教会側の主要メンバーの列挙にもあらわれている。すなわち、作者は「ギリシャのツァーリ」ヨハネス、総主教ヨシフのほか22人の府主教がここへやってきたとして、「第1はヘラクレイオンのアントニオス、第2はエフェソスのマルコス、第3はロシアのインドーロス……」のように番号をつけて22人全員の名をあげている。この順番はおそらく府主教たちの席次であろう。ちなみに、この公会議ではじめカトリック側と教義をめぐるはげしく論争するが<sup>(13)</sup>、中途から一転してインドーロスとともに合同実現に活躍し、のちにローマ教皇からやはりインドーロスともども枢機卿に任ぜられるニカリア府主教ベッサリオンの名前は7番目に位置している。

この公会議中に開かれた合計25回におよぶ全体会議とその日付も作者によって克明に記録されている。ただしその会議でいかなる問題が提起され、いかなる討議が行なわれたかについて、作者はまったく口をとざしている。東西教会の合同につながる教義問答は彼の興味の埒外にあったようである。

### 3 ロシア人を驚かせたもの

冷徹なまでの「事務的」性格は「旅」の一面であり、この文書はそれだけに終始しているわけではない。作者はヨーロッパの諸都市で目にしたもろもろの事物に対して並々ならぬ好奇心を示している。われわれがこの旅行記を珍重するのも、まず第一にこの理由からである。

当時のロシア人にとって、ヨーロッパはユーリエフからはじめていた。現在はエストニアに属してタルトゥと名づけられている都市であり、かつてはデルプトの名で知られ、ドイツ人は今でもドルバトと呼んでいる。15世紀中葉、この町はリヴォニア騎士団の領域の一部を形成し、ドルバト司教が支配していた。それはロシア人がはじめて見るカトリック圏の町であった。

ユーリエフの町は石できていて、大きく、町の建物は非常にみごとで、われわれは今までこのようなものを見たことがなかったので驚嘆した……

と作者は率直に述べている。このころモスクワの家屋はすべて木造だったのである。作者はまたこの町に「みごとな尼僧院」<sup>(14)</sup>があり、処女だけが剃髪してここにはいることができること、その尼僧たちはつねに雪のような純白の衣服と黒い頭巾をまとい、決して俗人とは交

(12) 亀井高孝編「北様聞略」、1965、p.60-61。

(13) J. Gill, *Church Union: Rome and Byzantium (1204-1453)*, L., Variorum Reprints, 1979, XIII *The Sincerity of Bessarion the Unionist*, p. 378.

(14) シュテークルによれば、1300年ごろ創立されたドミニコ派の尼僧院。G. Stökl, *op. cit.*, S. 176.

際しないこと、自分は府主教といっしょに彼らの尼僧院をたずね、彼らの清らかな暮らしぶりを見て驚いたこと、なども書き留めている。

自然の景観にもロシア人は目を見はった。「彼らのもとには丘があり、畑と果樹園が美しかった」

ドイツの最初の都市リュベックはモスコヴィアからの旅人にさらに強烈な印象を与えた。このことは、作者がこの町の描写にフィレンツェに次ぐスペースをさいていることからうかがえる。ロシア人の目に映じたリュベックは次のような都市だった。

われわれは非常にみごとな町を見た。そこには畑と小さな丘と美しい果樹園があり、建物は非常にみごとで、破風には金がかぶせてある。この町の修道院も非常にみごとで、すばらしい。そしてあらゆる品物が豊富にある。この町には水が引かれていて、すべての通りに樋で送られ、柱から出ている水〔噴水のこと〕は冷たくておいしい。キリスト昇天祭の日、主人がいくつもの<sup>ゴジューツァ</sup>神殿〔カトリックの寺院を作者は教会と呼ばず、正教のそれから区別している〕をおとずれたさい、われわれは金や銀の聖器、ならびにおびただしい聖者の遺骨を目にした。そこへ修道僧たちも来合せて、彼らの修道院<sup>(15)</sup>に主人を招いた。主人が出かけていくと、宝石や真珠でかざられた聖器と金糸で縫取りをした高価な袈裟をかぞえきれないほど見せた。われわれはここで、頭で理解することも言葉で言い尽くすこともできぬほど不思議なものを見物した。つまり、さながら生けるがごとき聖母が幼な子の姿をした救世主を手にかかえて立っているのである。鐘が鳴ると、一人の天使が両手に冠をささげて上から舞い下り、聖母に冠をかぶせる。空をわたるように星が動き、その星を見ながら3人の博士たちが歩いていく。彼らのまえに剣をもった男がすすみ、彼らのうしろからは斧をもった男がつづく。博士たちはキリストに金と没薬と香油の贈物を運んでいくのである。キリストと聖母たちのまえに着くと、彼らはお辞儀をする。するとキリストはふりむいて彼らに礼を言い、聖母に抱かれたまま子供らしくたわむれながら、両手で贈物を受けとる。人びとは礼拝して去っていく。天使が舞いあがり、冠をもち去る。〔これは鐘と連動したからくり人形の所作である〕そのあとで書物のある場所へ案内され、1000冊以上の本、あらゆる種類の不思議な財宝、ありとあらゆる工芸品、非常にみごとな建物を見た。それから食堂へ連れていかれ、さまざまな酒とさまざまな菓子を供された。ここで主人は丁重なもてなしを受けた。われわれは修道院から100サージェン〔1サージェンは2.1メートル〕ほどはなれた川に据えつけられている水車を見た。この水車で水を汲みとり、すべての家々へ送っているのである。同じ土手に小さな水車があって、美しいラジャ地を織っている。ここで2頭の野獣が建物の中にいれられ、窓辺の鎖につながれているのを見た。

(15) 1225年に創立されたフランチェスコ派の修道院。 G. Stökl, *op. cit.*, S. 178.

作者はここでも「非常にみごとな」(velmi chuden)という表現を何回か繰返している。chudenというのは、「奇蹟」を意味する言葉の形容詞形である。今まで夢想だにできなかった珍奇な物に接して、最大級の賛辞を呈しているのであろう。

都市の水道施設と噴水は「旅」の作者がとくに感嘆してやまなかったもので、リュベックをはじめとしてそれにつづくリュネブルク、ブラウンシュヴァイクからアウグスブルクにいたるドイツのほとんどの都市についての記述の中でこれに言及している。察するに、ロシアではまだ都市でも水の供給設備は皆無だったにちがいない。水車もこのころのロシアにはなかったらしい。

そのほかドイツの都市では、ブラウンシュヴァイクの家々が青い石の板で葺かれていたこと、エルフルトがその富と精巧な産物を誇っていること、バンベルクでは聖ペテロとパウロの日(6月29日)に300人の僧侶たちの行列を見たこと、ニュルンベルクの建物が白い石でつくられていること、この噴水がどこにもましてすばらしかったこと、アウグスブルクが他のどの町よりも大きく、ここでドイツ皇帝たちの肖像を見たこと、などの記事がわれわれの注意をひく。

ロシアの使節団は「小さな町インスブルック」を経由し、ブレンナー峠を越えてイタリアにはいった。フェラーラの町には5カ月もいたのに町そのものの描写はない。市場に隣接する教皇館に高い塔が立っていて、その塔に鐘つきの時計がついており、この時計と組合わさった天使のからくり人形のあったことが述べられているだけである。総じて作者はからくり仕掛につよい関心を示している。

ちょっと妙なのは、ロシア使節団がこの町で牝牛と豚と羊を1頭ずつ、それに鷲鳥と雌鶏、パンとチーズを購入したことがそれぞれの値段とともに記録されていることである。食料を買入れたのはこの町だけではなかったであろうに。

何といても、ロシア人に最も深い感銘を与えたのはフィレンツェの町だった。「旅」の作者は最初のように「驚嘆した」とか「驚いた」という言葉はもはや連発しないものの——彼は多分驚き疲れたのである——この町の説明に一番多く筆を費している。

この栄えある町フィレンツェはきわめて大きく、このような町はすでに述べたどこでも目にしなかった。この町のもろもろの神殿は非常に美しくて大きく、白い石でつくられた建物は高く、手がこんでいる。町の真中に非常に流れの速い川が流れており、アルノ川と呼ばれている。この川に非常に広い石の橋がかけられていて、橋の両側に家々がたてられている。この町に大きな神殿があり、その中に1000以上のベッドがある。その最低のベッドですら、みごとな羽毛布団と高価な毛布をそなえている。これは異郷からやってくる病弱な人びとと巡礼のため慈善の目的でつくられたものである。これらの者たちには食物、衣服、履物を与え、体を洗ってやり、丁重にあつかっている。元気を回復した者は町に感謝し、神をたたえながら去っていく。ベッドのあいだに礼拝する場所があり、毎日祈禱が行なわれる。もう一つの修道院は非常に堅固な白い石のつくりで、

門扉が鉄でできている。この修道院内の神殿は非常にみごとで、その内部に勤行する場所が40もある。聖骨も多く、宝石や金や真珠でかざられた高価な衣服がたくさんある。ここには40人の修道僧がいて、彼らは決して修道院から外へ出ないし、俗人が彼らをたずねることもまったくない。彼らの仕事は金糸や絹で柩の覆いを縫いとりすることである。この修道院を主人とわれわれがたずねたときに、これらのことをすべて見たのである。この修道僧がなくなったときに彼らを葬る場所は修道院の中にある。だれかが死にそうになると柩の中に納め、以前なくなった者の遺骸は〔柩から〕取り出して火で焼いてしまう。これを見ながら、人はいつか死すべきときが来るのを思い出すのである。この町では金糸を織りこんだ<sup>どんす</sup>緞子とビロードをつくっている。あらゆる品物が豊富にあり、オリーブ畑も多くて、オリーブ油をしばっている。町の中に聖母の御姿を描いた霊験あらたかな聖像があり、神殿の中のこの聖像のまえには病気のなおった6000人以上の人びとの蠟製の似姿がある。ある者は戦いで射たれ、ある者はめしい、ある者は手あるいは足を失い、ある者は名門の出で馬に乗ってここへやってきたのだったが、みな生けるがごとく立っている。老若男女がそれぞれの衣服をまとい、それぞれの病いと傷を負ってきたさまが似姿に描かれているのである。ここではまた緋色のラジャ地をつくっている。やはりここで西洋杉と糸杉の木を見た。西洋杉はロシアの松によく似ている。糸杉は樹皮が菩提樹のようで、とがった葉は縦に近いが、こちらはちぢれていてやわらかく、実は松かさに似ていた。この町には白と黒の大理石でつくられた大きな神殿があり、そのわきにはやはり白い大理石でつくられた鐘楼が立っている。その建て方の手のこんでいること、とてもわれわれの知恵をもってしてははかり知ることができないほどである。鐘楼をのぼりながら数えるとその階段は450段あった。この町で22頭の野獣を見た。町を取り巻く城壁は6ミリアである。

アルノ川を急流というのは平原の国からの旅行者の見方である。この川にかかる広い石橋とは、むろんポンテ・ヴェッキオのこと。この橋はもう14世紀の前半には現在見られるような姿をしていた<sup>(16)</sup>。1000以上のベッドをそなえた病院——作者は「大きな神殿」と呼んでいるが——とはサンタ・マリア・ヌオヴァ病院であろう。ダンテの「神曲」でうたわれるベアトリーチェの父ファルコ・ポルティナーリによって1287年に創立されたもので、今も市内第一の公共病院としての機能を果たしつづけている。鉄の扉をもった修道院とはどこのことかわからない。霊験いやちこな聖母像はオルサンミケーレの名で親しまれている聖ミカエル礼拝堂にあったものらしい<sup>(17)</sup>。「白と黒の大理石でつくられた大きな神殿」、つまりサンタ・マリア・デル・フィオーレ、別名ドゥオモは1434年に落成し、1436年に教皇エウゲニウス4世によって祝聖されたばかりだった。「旅」の作者たちは実に落慶3年目にここをお

(16) Guida d'Italia del Touring Club Italiano, Firenze e Dintorni, Milano, 1974, p. 304.

(17) シュテークルによる。G. Stökl, *op. cit.*, S. 165.ただし、目下イタリア滞在中の清水廣一郎氏によれば、その像のまえに絵馬を奉納する習慣は現在まったくないという。



とずれたことになる。ジオットの鐘楼は100年以上もまえに建立されていた。厳密に言えばこの階段は414段である。「旅」の作者は端数を切り上げたのであろう。

東西教会の合同はまがりなりにもこのときの公会議で実現し、東ローマ皇帝と府主教たち（総主教は公会議の開催中に急死していた）、それにローマ教皇と枢機卿たちが1枚の文書に調印した翌日、サンタ・マリア・デル・フィオーレで盛大な会同ミサが挙行された。それは大理石の肌が輝くばかりの真新しい教会にとっても、またこの教会をつくり上げたフィレンツェの市民にとっても、最もはれがましい瞬間であったことであろう。このとき調印された文書がローマではなくてフィレンツェのメディコ・ラウレンツィアーナ図書館に今もおさまっているのもゆえなしとしない。

このときのミサについて述べる直前で、「旅」の作者は「この町で蚕を見た。蚕から絹糸をひくところも目にした」という一節を唐突に挿入している。概してフィレンツェの繊維産業（緞子とピロード、ラジャ、絹）の記述は分散していて、まとまりがわるい。

ロシア人たちは帰り道にヴェネツィアを通り、どうい理由からかこの町に3カ月も滞留した。「旅」の作者は地中海世界随一の港町を次のように描いている。

この町は海上にあって、ここに通ずる陸路はない。岸から13ミリアはなれた海の中にある。町の真中を大船やガレー船が行き交い、あらゆる街路に水があって小舟に乗って往来する。非常に大きな町で、建物はみごとで、あるものは金でかざられている。あらゆる品物が豊富にある。これはすべての国々、すなわち、エルサレム、コンスタンチノーブル、アゾフ、トルコ、サラセン、ドイツから大船がはいってくるからである。町の中に福音書作家聖マルコの石づくりの教会ツェルコフイ〔ここではなぜか神殿ではなく教会という言葉が用いられている〕がある。この教会の柱はあらゆる色合いの大理石からできていて、かずかずの聖像もみごとであり、あるギリシャ人のつくったモザイクもある。最上部にいたるまで非常にみごとな眺めである。内部には大理石を非常にみごとに彫った聖者たちの像がある。教会そのものが大きなものである。正面の扉の上に内側から4頭の馬のブロンズ像が据えられている。金めっきをした巨大な像で、さながら生きているように見え、2匹の大きな蛇がぶらさがっている。この教会には聖マルコが葬られている。多くの聖骨がコンスタンチノーブルからもたらされている。町の近くの島々に多くの修道院があり、そのほかに教会の数も多い。

水の都のたたずまい、とりわけ活気にあふれた外国との交易、ほぼ現在の形状をそなえていたサン・マルコ寺院の華麗さがロシア人をうったようである。

フィレンツェやヴェネツィアに比べると、ローマの描写は生彩を欠いている。作者は使徒ペテロとパウロの遺骸について長々と述べたあとで、「このもろもろの教会はかつて非常に大きく、屋根には金をかぶせてあり、建物もみごとなものだった。しかし町がさびれたためにそれらはすべて荒れ果ててしまった」と書いている。シスマが解消しても復興は容易にす

すまず、サン・ピエトロ大聖堂の建築がまだはじまっていない時期だった。

#### 4 道中の苦難

旅に危険はつきものである。構成人員 100 人、新興のモスクワ国家を代表する大使節団ではあったが、彼らもまたさまざまな苦しみをなめなければならなかった。

リガを出帆してバルト海に出たときには次のような事件があった。

〔出帆後〕数日たった真夜中に、風もないのに海が荒れ、船が大波にもまれたために、最上部まで水びたしになった。われわれは皆もう助からないと思い、「残念だ、ここで死ぬのか」と言い合った。だが大波は長くつづかなかった。そのあと暗闇がおそってきて、風が止んでしまった。ドイツ人〔の船乗り〕たちは「こんなことになったのはわれわれのせいではなく、正教徒どものせいだ」と不平の声をあげた。彼らは主人のもとへ来てこう言った。「とんだ災難だ。暗くて、風はない。近くに岩島ゴトランドがあり、そのあたりには海賊どもがうようよしている。そのことで頼みがある。神に祈ってくれ。おれたちも自分の流儀で祈るから」主人はアヴラーミイ主教、トヴェーリの使者フォマー、修道院長ワッシアン、それにすべての貴族たちを呼んでこう言った。「主教よ、祈ってくれ」主人は配下のギリシャ人たちとともにギリシャ語（ゴアイギトリア）で旅の加護者たる聖母像に祈り、アヴラーミイ主教は自分のロシア語で祈った。すると暗闇が散りはじめ、夕方になって追風が吹き出した。

ここでいう「暗闇」とは日蝕だったかもしれないし、あるいはバルト海特有のふかい霧であつたかもしれない。

19 世紀のイエズス会士歴史家ピルリングは、イシドーロスの一団が海路をとったのはリトワの勢力圏にはいっていたバルト海沿岸のサモギティア地方を避けるためだったとしているが<sup>(18)</sup>、海には海の危険があつたわけである。ついでに言えば、このときから 34 年後に最後の東ローマ皇帝の姪ゾエがローマからモスクワ大公イワン 3 世のもとへ興入れしたときも、リューベックからタリンまで船に乗っている。

ロシア人たちは帰途にも災難に逢った。今度は山賊におそわれたのである。場所はバルカン半島、ザグレブを過ぎドラヴァ川を北に渡った森の中だった。「旅」の作者は、このあたりには「つねに盗賊が出没し、武装した兵士を連れるか、神の助けがなければ通過がむずかしい」と述べたあとで、「フォードルの土曜日に毛皮外套（シベリア）を奪われた」と書き加えている。しかしテキストからだけでは、だれの外套がどのような状況で強奪されたのか不明である。一般にヴェネツィア以後の旅の記述はごく簡単であり、都市についても具体的な描写がな

(18) P. Pierling, *La Russie et le Saint-Siège: Etudes diplomatiques*, vol. 1, Paris, 1896, p. 23.

い。ドイツやイタリアの都市を見たあとでは東欧の町々は大きく魅力がなかったということだろうか。

ロシアの使節団はリューベックに上陸してからヴェネツィアを去るまでのあいだは、とりたてて旅に難渋した様子はない。周辺の地域に比べれば、それだけヨーロッパの中央は安全だと思われたことだろう。

## 5 中世の「西欧主義者」

ときとして文章に書かれたことに劣らず、書かれなかったことが大きな意味をもつことがある。「旅」の場合がまさにそれであった。その理由を知るためには、まずイシドーロスの身の上を起こったことを見なければならぬ。

「旅」の作者はスーズダリ主教アヴラーミにしたがって1440年9月に故郷に戻ったが、府主教イシドーロスの帰国はその翌年の春である。彼は教皇から枢機卿に任じられるとともに教皇特使の資格も与えられていたので、リトワ、リヴォニアを巡察していたのである。教会合同に対するモスクワの反応を見まもっていたともいう<sup>(19)</sup>。マカーリイの「ロシア教会史」によれば、モスクワに着いたイシドーロスは自分の行列の先頭にラテン風の十字架をかかげさせていた<sup>(20)</sup>。それはカトリック嫌いのロシア人に対する挑戦のようなものだった。まもなくクレムリン内のウスペンスキイ寺院で彼がフィレンツェ公会議の決定を読み上げさせようとしたとき、モスクワ大公ワシーリイ2世はイシドーロスを逮捕させ、チュードフ修道院に監禁してしまった<sup>(21)</sup>。そればかりか、大公が召集したロシア主教会議はフィレンツェ公会議の決定を無効と宣言した。ギリシャから受け入れた正教の正統性とカトリックに対する優位性を確信しているロシア人にとって、ローマ教皇が主導した合同は耐えがたいものであった。この事件を契機として、東ローマ帝国滅亡に先立つ1448年にロシア教会がコンスタンチノーブル総主教の支配を脱して独立教会となることはよく知られている。トルコの脅威のもとで東ローマ帝国がやむなく採用した修正主義的路線をモスクワは承認しなかったのである。

実は公会議に出席した正教会側の代表の中にさえ、カトリックとの合同に異論をさしはさむ者がいた。エフェソス府主教マルコスとスタヴロポリス府主教イサイアスは合同文書に署名することを拒否した<sup>(22)</sup>。スーズダリ主教のアヴラーミは1週間投獄された末、しぶし

(19) A.В.Карташев, Очерки по истории русской церкви. т.1, Париж, 1959, стр. 355.

(20) Макарий, указ. соч., стр. 372.

(21) この年の9月、イシドーロスは大公の黙認のもとにモスクワから逃亡し、リトワ、コンスタンチノーブルを経てローマにおもむく。1452年、ローマ教皇の委任をうけた彼は200人のイタリア人射手をひきいて、コンスタンチノーブルの救援に馳せ参じた。その翌年、トルコ軍の猛攻を受けて東ローマ帝国の首都が陥落したとき、イシドーロスは乞食と法衣を交換したおかげであやうく一命をとりとめる。乞食が枢機卿として殺されたのである。ふたたびローマに戻って帝国再興の活動をつづけた。1463年没。彼は自分なりに信念を貫いたのである。

ぶと署名することに同意したのだった<sup>(23)</sup>。ロシア代表団の一員だった僧シメオンがこの公会議について反カトリック、反インドーロスの主張で貫かれた記録をのこしている<sup>(24)</sup>のも不思議なことではない。

ロシアでのインドーロスの不評判は早くも同時代の年代記からうかがうことができる。もともとワシーリイ大公は「古来の正教をもち帰る」ことを条件にインドーロスのイタリア行をみとめたという。しかしインドーロスはカトリックとの合同を積極的に支持しこれを推進することによって背信行為をはたらいた、とヴォスクレセンスカヤ年代記はギリシャ出身の府主教を弾劾している<sup>(25)</sup>。

19世紀以後に書かれた各種のロシア教会史の中でも、インドーロスはきまって正教会に対する裏切り者としてあつかわれている<sup>(26)</sup>。フィレンツェ公会議の決定を否認したロシアの態度は正しかった、とされているのである。

驚くべきことには、現代のソビエトにおいてすらこのような評価は少しも変わっていない。中世ロシア史家で「旅」のテキスト校訂に関してすぐれた業績をあげているカザコワ女史は次のように書いている。「ロシアの政治的支配層と教会関係者たちは合同の問題について意見を同じくしていた。彼らは、合同が実現すればロシア教会がローマ教皇の権力に従属する結果になるであろうと正しく理解し、合同を拒否したのだった」<sup>(27)</sup>(強調は中村)

ロシアではいまだにこのような雰囲気一般的であるからこそ、「旅」の記述の中に反カトリック的な言辭がまったく見られないことが注目されるのである。インドーロスへの反感もない。逆に「旅」の作者は一貫してインドーロスを「主人」と呼んでいる。この呼びかけはフィレンツェ公会議の開催中も閉会後も変わっていない。

公会議の最後の全体会議で合同を取り決めた文書が調印されたさいの記述も淡々としている。「〔1439年〕7月5日、総会があり、そのとき聖三位一体をいかに信仰するかについての文書が書かれ、教皇エウゲニウスとギリシャ皇帝ヨハネス、それにすべての枢機卿と府主教たちがそれぞれ自分の手で署名した」ここには合同という表現はない。公会議ではげしい議論の中心となったのは、聖霊が子からも(filioque)発出するというラテン側の教義をめぐってであった。正教側がそれを承認したのである。聖三位一体云々とはそのことを指し

(22) J. Gill, *op. cit.*, XV The Freedom of the Greeks in the Council of Florence, p. 226.

(23) А.В.Карташев, указ. соч., стр. 353.

(24) シメオンの著作は次の書物に収められている。А.Попов, Историко-литературный обзор древне-русских полемических сочинений против латинян, М., 1875, стр. 344-359.

(25) Воскресенская летопись, Полное собрание русских летописей, т.8, СПб., 1859, стр. 100-106. 一般に、古ければ古いほどキリスト教の信仰が純粋であり、時代がくだるにつれて教義に不純な要素が加わるという考えはロシア人の間に根づかった。この信念はのちの分離派(旧教徒)によって受け継がれている。

(26) たとえば上記の Макарий, や А.В.Карташев の著作を参照。Голбинский はきわめて慎重な筆使いをしているが、基調においてはやはり同じ意見と見られる。Е.Голубинский, История русской церкви, Период второй, т.2, М., 1900, стр. 456.

(27) Н.А.Казакова, Западная Европа..., стр. 8.

ている。

「旅」の作者は正教会の代表の中に署名を拒んだ者があったこと、アヴラーミイ主教が署名を強制されたことなどには一言もふれていない。教皇の名を皇帝より先にあげているのは、署名の順序が実際にこのとおりだったからであろう。フィレンツェに現存するこのときの文書はたしかに左側にラテン語、右側にギリシャ語の本文が書かれ、ラテン語テキストの下にカトリック側、ギリシャ語テキストの下に正教側の代表がサインしているのである。

リヴォニアのユーリエフにはじまり、以後ドイツとイタリアの諸都市でインドーロスは足まめにカトリック教会や修道院をおとずれた。「旅」の作者はつねに府主教に随行して、それらの建物の「みごと」なこと、聖器や聖遺物などの多いこと、修道僧たちの規律の厳格なこと、などに賛嘆の言葉を惜しまなかった。カトリックの教会を「神殿」と呼んで正教の教会と一応区別してはいるものの、これを忌避してはいないのである。

「旅」の作者は、要するに、開かれた心の持主であった。それは彼が当時の知識人としてはめずらしく宗教的立場から自由であったためである。その自由の程度は、ソビエトの歴史家カザコーワ女史よりもさらに著しいのである。

ヨーロッパの諸都市の描写においても、それぞれの都市がもっている長所のみを列挙していて、短所については一切ふれていない。記録に値するのは、ロシアの都市がいずれ取り入れてしかるべきもの、模倣に値するもののみ、と考えていたふしすら感じられる。公会議への出発以前から彼がヨーロッパの諸言語に通じていたとは考えられないが<sup>(28)</sup>、「旅」の記述から見るかぎり、彼をロシアにおける最初の「西欧主義者」の一人と呼ぶことができるのではあるまいか。

(28) ただし「旅」の作者はすどい聴覚に恵まれていて、ニュルンベルグでドイツ語の方言を聞き分けている。

◀ Résumé ▶

GERMAN AND ITALIAN TOWNS IN THE FIFTEENTH CENTURY  
THROUGH THE EYES OF A RUSSIAN TRAVELER  
— From the Notes of “A Journey to the Florentine Council” —

Yoshikazu NAKAMURA

It is well known that a Russian delegation took part in the Florentine Council which was held in Ferrara and Florence in 1438-39 and Isidore, the Russian Metropolitan, played an active part in the union of the Eastern and

Western Churches on the eve of the fall of the Byzantine Empire. Metropolitan Isidore, a Greek by nationality, had been to Basel, Switzerland, before, but for most of his Russian followers, consisting of about a hundred men, it must have been their first voyage to Europe. A Russian in the Metropolitan's retinue took notes on the journey, which started from Moscow in September, 1437, and ended with their homecoming just three years later. The document, titled "A Journey to the Florentine Council", has the following characteristics:

1. The anonymous author did not fail to note all the towns through which the delegation passed and register the distance from one town to the next, expressing it in *versta* from Moscow to Lübeck including a seaway on the Baltic, and *milia* (i.e. mile) in Europe and the Balkan and East European countries on the way home. All the 22 Metropolitans of the Orthodox Church who attended the Council are enumerated without omission and the dates of the 25 sessions are also meticulously recorded. On the other hand, the author pays no attention to what was discussed in those sessions. Therefore, as some historians point, he might well be supposed not to be a clergyman but a layman.

2. European towns, beginning with Tartu (then called Jur'ev by the Russians) under the dominion of the Teutonic Order, extremely surprised the author. He does not conceal his great astonishment at stone-built houses, magnificent cathedrals and cloisters, awe-inspiring relics, waterworks, fountains, water mills etc., the like of which he may have never seen or heard of in Muscovy. He explains in detail the mechanical works that he saw in Lübeck and Ferrara. Of all the towns mentioned, the largest space is given to the description of two Italian towns during the Renaissance, Florence and Venice. The author seems to have been impressed above all in Florence by the Santa Maria Nuova Hospital and the Santa Maria del Fiore Cathedral, so-called Duomo, consecrated only three years before, and in Venice by its flourishing trade with overseas countries and the dazzling San Marco Cathedral. But Rome appeared to be a little desolated and not completely recovered from the Great Schism.

3. We are interested by what the author did not write as well as what he wrote. Unlike Simeon, another member of Isidore's delegation, the author of "A Journey" does not deliver any word of reproach to the Florentine Council where the union was somehow accomplished. It is clear that he has no prejudice against the Catholics. Such a standpoint was quite exceptional in 15th century Russia, where the Metropolitan Isidore was imprisoned and banished soon after his return by the Grand Prince Vasily II on the charge of approving the union. It should be taken into consideration that modern historians of the Russian Church and even Soviet scholars of Medieval Russia never cease blaming Isidore as a betrayer. The author was an

open-minded man, because he was free from religious prejudice. We might aptly call him one of the first *Westernizers* in Russia.